

## 【医者に不信感を持った理由 1】

大病院で見た、心身疾患への対応の現実から医療の限界を感じたというお話、その1です。

うつ病と診断され、薬や漢方、そして主治医との対話（主治医は傾聴をされていたと思います）による治療が続き、約2年。

しかし体に出た症状の中で最後まで残った症状…

・目が疲れ易く、回復に時間がかかり、回復中は頭痛などが起きて目を使う作業（読書、パソコン操作等）が継続出来ない

…は、特に回復を感じる事が出来ず、会社の設定した休養期限が迫るのに対し、焦り始まった時でした。

「セカンドオピニオンをとりましょうか」…先生もこのままでは復職が危ういと感じて下さったらしく、提案してくださりました。

紹介いただいた病院は県内でも指折りの大学病院。

相談の結果、検査や投薬のチャレンジ  
をしたいということで  
2週間の検査入院が決まりました。

…精神科への入院。

一般の病棟への入院とは、少々  
違っていました。

- ・病棟への入り口は施錠

- ・病棟への外への外出は許可制  
(始めの一週間は外出不可)

- ・携帯電話の使用時間帯の制限、  
それ以外の時間は預かり

- ・刃物はお風呂の時間以外は  
預かり

…ある意味、軟禁という感じかも  
知れません。

当時、精神科には、私のほかに  
2,3人の男性の他、約20名の  
女性がおられました。

その半分はとても若い…二十歳  
前後の方々、中には当時小学生の  
方もいて、残りの半分は、主婦さん、  
おばあさんという感じでした。

私の治療は、検査と投薬が中心でした。

心身症は、心因性が強いので心のケアが大事とは本にもありましたが、実際に調べてみると、

例えば医者とカウンセラー（臨床心理士）と一緒に連携している個人病院を見つけることはできしたが、

残念ながら、その（県内指折りの）大病院ではカウンセリング機能はありませんでした。

先生に聞くと、医者とカウンセリングの連携している病院は少ないとの事でした。（びっくり！）

そして、検査入院後 1 週間に、ある事件をきっかけに、医療に不審を抱くようになったのでした。

2へ続く・・・。